

# THE VINES

## THE VINES 完全復活!!!

世界的成功を収めると同時に幾多の困難を乗り越えた天才クレイグ・ニコルズが  
再びロック初期衝動に立ち返り、華麗なる原点回帰を遂げ完成させた過去最高傑作!!



BMG JAPAN移籍第1弾アルバム

# MELODIA

## ザ・ヴァインズ | メロディア

9.24.2008 OUT

BVCP-24141 Special Price ¥2,300 (tax incl.)

●日本盤のみボーナス・トラック×3 + 「He's A Rocker」ビデオ収録



着うた、着うたフル  
絶賛配信中!

BMG bmgjapan.com/thevines



## EDITOR'S NOTE

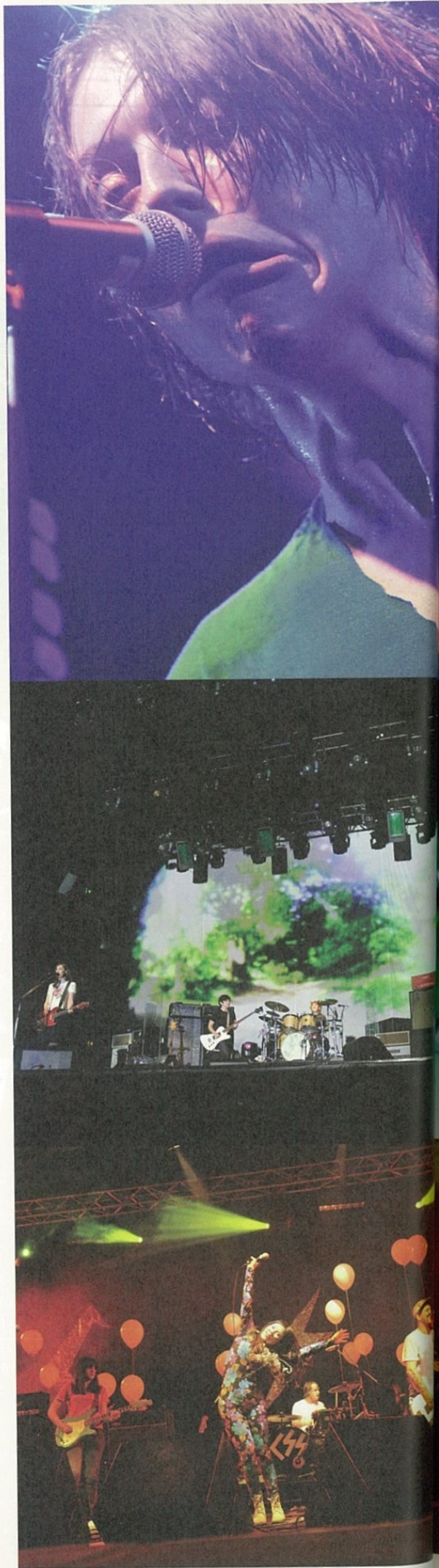
この本が皆さんの御手元に届く頃には、もはや〈フジ・ロック〉、〈サマーソニック〉共に、無事終了しているはず。今年の夏フェスは、いかがだったでしょうか？ と、ちょうど1年前の原稿のカット&ペーストから始めてみました。もうへとへとでありんす。なので、今号はここだけはゆるゆるで送ります。あとは、ラヴ・ソング特集を筆頭に、激濃厚なので、よろびくです。

7月に入ってから、ヘルニア悪化&謎の激頭痛に苦しんでいたところ、なんでも全体の先生によれば、左首の後ろの痛みを無意識にかばってたせいで、そこから首の中心に対してちょうど反対側にある右首の関節もおかしくなっており、それゆえの激頭痛だった模様。全体の先生曰く、「デスクワークは出来るだけ控え、30分に一度歩くこと」だそうで、それじゃ仕事になりまへんがな。で、「日々とにかく歩け」というお達し。なので、〈フジ〉三日間歩き回ること決定。ここ数年の〈オアシス〉周辺で友達とダラダラ過ごすというパターンも改善すべく臨んだわけです。

といつつも、金曜朝まで仕事だったので、東京を出発したのは、午後。ジェイミー・リデルにも、ラスカルズにも、スプーンにも、ゴシップにさえ間に合わず。とほほ。で、結局のところ、今年の〈フジ〉はザ・ヴァインズでスタートすることになったでヴァインズ。ライブが始まる前にステージ裏を覗きにいったんだけど、もうクレイグが完全にパッパパー状態で、あれはハラハラしたなー。でも、良かったでヴァインズ。あの1曲ごとにメンバーがお辞儀するの、絶対、ビートルズの真似だよな。で、その後、トムの髪型が長髪のセンター分けという、すっかりトレビアンな感じになったカサビアンを何曲か眺めながら、得意のベンジーのモノマネをしつつ、「次はシャーベッツが観たい」とか嘘八百。結局、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン待ち。15年前の〈川崎クラブチッタ〉でのド下手かつ、「ほとんどDATから音が鳴ってんじゃん!」「ラヴレス」の曲じゃなくなると、いきなり音圧下がらんじゃん! というライブを観た人間としては、期待感皆無。ただノイズで、ループものだと、絶対うとうとするのに気持ちいいと思い、〈グリーン〉の後方中腹辺りをキープ。うとうとするにはばっちりでした。相変わらず、ドラムが学園祭レベルなのは、ちょっと感動いたしました。で、電気グルーヴ観たさに〈オレンジ・コート〉に移動。でも、なんか出音がちょっとおかしくて、不完全燃焼。でも、セットの流れとか、アレンジ的にも、絶対、以前の〈グリーン〉を凌ぐ出来では。あとは、ダン・ル・サック覗いて、グランド・マスター・フラッシュの「え、今は何年ですか?」な感じを楽しみつつ、寝ました。

土曜日は、編集部スタッフ、ゆうこ、ゆーだいのゆーゆーコンビがゆーゆー爆寝しているのを尻目に、コーティナーズを見学に。学園祭でした。で、ハード・ファイ。リッチーの真っ青なボロ・シャツとドロボー髭に撃沈。で、クリプス観るつもりが、急速エロールの取材時間が出たもんで断念。取材後、ズートンズのおしり数曲を見学。やっぱ最初のアルバムがいいっすね。で、伝説フラワー・トラヴェリン・バンドを観に。超期待ゆえ、わざわざ〈ヘヴン〉まで来たのに、70年代のフュージョン・バンドみたいな音色と演奏に1曲目の途中で退散。で、例によって、期待せずに観たプライマルズ。いつもそうなんだけど、やっぱよくて、なんか頭来る。「アイム・ルーゼング・〜」と「スワスティカ・アイズ」が特に○。でも、ゲスト参加のCSS/ハナエちゃんの前段ステージでは見せないワンピース姿が◎。で、アンダーワールド。う〜ん、まあ、悪くなかったっす。で、深夜の〈レッド〉に移動。エロール・アルカンは、う〜ん。スイッチは、う〜ん。で、これまたしゃくなんだけど、最後のリッチー・ハウティンがばっちりでした。同じ売げ方してる人間としては嬉しゅうございました。というわけで、リッチー法典を編纂。寝ました。

結局、日曜日は例年通り、遅めの活動開始。夕方の豪雨もあって、「CSSに全力を注ぎたい」というエクスキューズをおっ立て、だらだら。で、CSS、良くも悪くも、ライブ・バンドとしてはまったく別物。以前の学園祭さえも乗り越えたゴミ感がなくなっていたのと、2ndからの曲がまだこなれてないのがちょっと残念だったかな。でも、ドラム、TCTCだっけ? あいつがパワー・ドラマーなのが良くない。帰り時間の関係で、ザ・ミュージックは前半戦6、7曲。頭3曲辺りはかなり固かったの、後半観たかったかな。その後、〈レッド〉でやってるネオン・ネオン（これが良かった! バンド編成だと思ってまへんでした）を覗きつつ、今年の〈フジ〉はあっさり退散。というわけで、リッチー法典を編纂。しつこい。では、今年も、夏フェス・シーズンにほとんど無関係な1冊。世間とズレてるのは承知の上で、今号もさらなる自信を持って、お届けしたいと思います。いや、頑張った。では、今号も楽しんでやって下さい。





# snoozer

## ISSUE #069

### EDITOR

田中宗一郎

Soichiro Tanaka

### ASSISTANT EDITOR

萩原麻理  
佐藤望美  
平野祐子  
永松雄大

Mari Hagihara  
Nozomi Sato  
Yuko Hirano  
Yudai Nagamatsu

### PRODUCTION ASSISTANT

上野恒星

Kosei Ueno

### PHOTOGRAPHY

相澤心也  
井上雅央  
ジェイソン・エヴァンス  
加藤亜希子  
古溪一暎  
ジェイ・ブルックス  
西郡友典  
森川陽介  
吉場正和  
ジョナサン・ワース

Shinya Aizawa  
Masa Inoue  
Jason Evans  
Akiko Kato  
Kazumichi Kokei  
Jay Brooks  
Tomonori Nishigori  
Yosuke Morikawa  
Masakazu Yoshida  
Jonathan Worth

### INTERPRETATION

河原希早子  
立神和依  
伴野由里子

Masako Kawahara  
Kazuyo Tategami  
Yuriko Banno

### TRANSLATION

大野郁子  
川田志津  
長門雅美  
溝口恭子

Ikuko Ohno  
Shizu Kawata  
Masami Nagato  
Kyoko Mizoguchi

### ASSISTANT

今村真紀  
永田真由美

Maki Imamura  
Mayumi Nagata

### PRINTING DIRECTOR

石井律

Ritsu Ishii

### PRINT

凸版印刷株式会社

Toppan Insatsu, Japan

### PUBLISHER

孫 家邦

C.P.SUN

### SNOOZER

3-12-3-3F, KITA-AOYAMA  
MINATO-KU, TOKYO  
TEL.03-5766-8366 FAX.03-3499-0725

### PUBLISHED by

LITTLE MORE CO.,Ltd / 株式会社リトル・モア  
3-56-6, SENDAGAYA  
SHIBUYA-KU, TOKYO  
TEL.03-3401-1042 FAX.03-3401-1052

2008年10月18日発行

第12巻第5号(通巻78号)

©スヌーザー/田中宗一郎/(株)リトル・モア 2008

本誌記事および写真の無断転載を禁ず

photography by KAZUMICHI KOKEI





The Vines

by

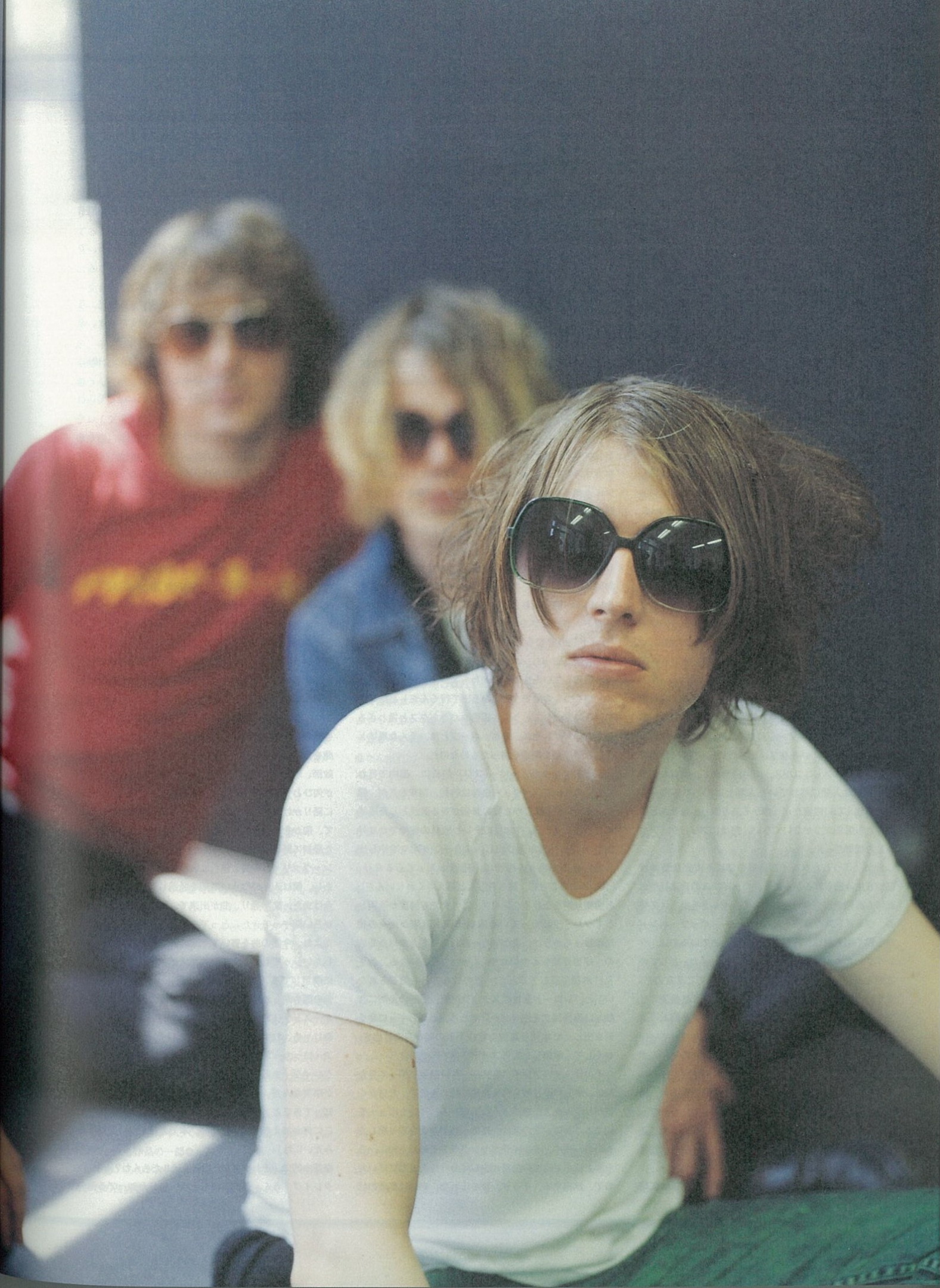
Soichiro Tanaka

photography

by

Akiko Kato







ロック・イズ・バック! —— そんな風に世界中が色めき立ったのは、

2002年のこと。そして、その主役は、世界規模で見た場合、

ストロークスではなく、間違いなく、このヴァインズだった。

バンドの中心人物、クレイグ・ニコルスは、豪州の片田舎から

連れ出されるや、瞬時に、時代のポップ・アイコンへと昇りつめる。

セックス・ゴッドの異名を取るほどに。だが、そもそも音楽以外には

何ら外界との接点を持つことの出来ない、精神疾患を抱えた、

元ひきこもり少年だった彼は、やがて内側から崩壊。破滅の道へ。

すべては暗礁に乗り上げる。だが、ヴァインズは帰ってきた。

いまだすべては不安定なまま。だが、輝きは失われていなかった

ク

レイグ・ニコルスは、やはりクレイグ・ニコルスのままだった。2ndアルバム以降、少しずつバランスを崩し出した頃と比べて、良くも悪くも何も変わってはいなかった。勿論それは、彼が抱える精神疾患、アスペルガー症候群のせいでもあるのだが、相変わらず精神状態は常に不安定。今回、そうした局面を、期せずして二度ほど目撃することになったが、彼がバランスを崩し出すと、すぐにメンバーもスタッフもさっと身を引いてしまう。おそらくはそれが互いにとってもっとも有益な方法だとはわかっていても、その光景はどうにも痛々しく、僕のような人間には、それを日常のこととして受け入れることは、とても一朝一夕には無理だと思わせるに十分だった。

〈フジ・ロック〉でのステージ終了後、長年ずっと彼らのインタビューを担当していた元本誌編集部員、唐沢真佐子がバックステージに顔を出した際に、会話を交わす間もなく、いきなり「出て行け!」と怒鳴り声を上げるクレイグ・ニコルス。つい前日まで、彼女の消息をいろんな人間に尋ねていた人間とは、とても同一人物とは思えない態度だが、端から見ると、ほとんど誰のことも区別がつかないぐらい、完全にフリーク・アウトした状態だった。

だが、こうしたクレイグ自身の常に不安定な精神状態から生み出されるからこそ、ヴァインズの音楽は他の誰にも真似の出来ない剥き出しの生々しさを持ちえている。ヴァインズの音楽を凡百のパワー・ポップ・バンドから遠く引き離し、特別なものたらしめているのは、クレイグ・ニコルスの希代のメロディ・メイカーとしての才能と共に、こうした残酷な構造があつてこそなのだ。そういう意味からすれば、ここ日本でも9月最終週にリリースされることが決まった通算4枚目のアルバム「メロディア」は、文字通り、完全復活作だと言っていいだろう。何故なら、愚鈍なまでに粗雑な世界と、人里離れた秘境で育った五歳児のように感情が剥き出しになったままの青年が、時として絶妙な歪みを軋ませ、時としてほんの一瞬だけ幸福な邂逅を見せるという、ヴァインズ特有の感情のジェットコースター状態がまたここで再現されているわけだから。しかも、その大半が2分前後のコンパクトなポップ・ソングとして。

それにしても、〈フジ・ロック〉でのステージは素晴

らしかった。ステージ上のクレイグには、やはり圧倒的なカリスマがある。一瞬たりとも目が離せない。ステージに上がる前から、完全にフリーク・アウトしたまま、頭の上に何度も水を降りかけ、胸元を引きちぎったTシャツを脱いだり、さかさまに着たり、また脱いだり。極限まで顔面を引きつらせ、目をひんむき、完全にひっくりかえった声で絶叫する。終始ハラハラさせられたし、勿論、決してうまいバンドではないが、時折、とんでもない瞬間が何度も巻き起こるのだ。「一緒に歌ってくれ、ハンド・クラブも!」という短いMCの直後始まった「ライド」の素晴らしさったら、なかった。オーディエンスも最高だった。おそらくその大半が、彼の帰還を心から祝福していた。にもかかわらず、ステージ上の青年は、いくつもの曲で「ここから出て行くん」だと絶叫しているのだから、どうにも残酷なパラドクスと言わざるをえない。やれやれ。だが、ポップとは、そんな風にどうにも不思議な構造を持ったものなのだ。

以下のインタビューは、〈フジ〉前日に、都内で行われたものだ。インタビュー自体は終始、穏やかだが、撮影タイミングでは、かなりの緊張が走る殺伐とした現場になった。その日、1本目のテレビ取材の後半でかなり支離滅裂な発言が飛び出し、スタッフが冷や冷やし出したところで我々の順番に。部屋に入ってくるなり、「僕の尋ねることに、誰もきちんと答えてくれないんだ!」と金切り声を上げるクレイグ。これまでも何度か通訳としてクレイグに会っている編集部萩原麻理が諸々の相談に乗ってからは、ようやく一度は落ち着きかけたものの、撮影が始まるやいなや、「どいつもこいつも、わざと日本語で話してるんだ! 誰の言うことも信じられない」と、レコード会社のスタッフ初め、周囲の人間に容赦ない罵詈雑言を浴びせかけ始める。わざとギョロ目を剥き出し、日本語を真似た意味不明の叫びを上げ出す。かくして、準備した撮影アイデアはすべて断念。

その後、短いブレイクを挟み、取材部屋に戻ってきた時は、少しばかり落ち着きを見せ始めたので、とにかく彼がリラックス出来るような話題から、インタビューを始めることに。その後は、終始、穏やかさを取り戻したものの、途中、クレイグがサングラスを外した時に、さっきと比べて、彼の白目が少しばかり赤身を帯びていたもので、納得する。そうか、なるほどな。やはり普通の状

態では正気を保ってられないということなのだろう。おかえり、クレイグ。この素晴らしいクルエル・ワールドへようこそ。

interview with CRAIG NICHOLLS & HAMISH ROSSER

●これ、マサコからのメール。

クレイグ・ニコルス (以下、クレイグ) 「ワオ! あ、でも、僕、読めないや (笑)」

●でも、メールのこのキャラクター、覚えてない?

クレイグ 「あ、アストロ・ボーイ (鉄腕アトム) だ。うん、彼女にアストロ・ボーイもらったの覚えてるよ。今でも持ってるよ。すごく好きなんだ」

●あいつはね、このオーストラリアに取材に行った後に、すべてやり切ったと思って、辞めたんだよ。

ヘイミッシュ・ロッサー (以下、ヘイミッシュ) 「てことは、この記事の後?」

クレイグ 「彼女、今は何やってるの?」

●音楽業界からは離れてるんだ。

クレイグ 「ああ、そうなんだ。オッケー」

●また、仕事は始めてるけど。

クレイグ 「よかった。じゃあ、僕と同じだ (笑)」

●でも、〈フジ〉にはヴァインズを観に来るって。

クレイグ 「クール! じゃあ、会えるんだね」

●うん。で、今日は君と話すのは初めてだし、あいつの代わりってことだから、ちょっと荷が重いんだけど。

クレイグ 「大丈夫 (笑)。僕の方も、インタビューらしいインタビューは、ほぼ初めてって感じだしね」

●じゃあ、自分達としては、このアルバムは自分達のどういう時代の、どういうフィーリングをリプレゼンしていると思いますか? どこか、もう一回残酷な世界に戻ってきたっていう宣言でもあると思うんだけど。

クレイグ 「まあ、バンドに入る前から、僕にとっては何もかもが、ずっと残酷なものだったからね。17歳の頃に曲を書き始める前から、僕には何も理解出来なかった。教師、政府、両親——そういうあらゆるクリシェすべてが何ひとつ理解出来なかったんだ。でも、音楽だけが僕に語りかけてきてくれた。だからこそ、僕は音楽に対して、何かを返したいと思ってるんだ。だから、多分、また最初に戻る、スタートに戻るって感じかな。『ヴィジョン・ヴァリエ』の後、僕らはあんまりツアーもしなかったし、僕は人生のつらい時期を通過してた (笑)。でも、今はまた、文字通り、曲が出来て。僕らがやること、僕が長い間やってきたことってまさにそれだけだと思うんだよね。今回の曲を書いている間、僕は『全部シングルにしたい』って風に考えてたんだけど。僕はこのアルバムに満足してる。ハッピーなんだ。びっくりすることに、他の国も来られた。この前のアルバムの後、もう二度とオーストラリアから出ることはないと思ってたからね」

●じゃあ、1曲目の「ゲット・アウト」とか、「ヒーズ・ア・ロッカー」には、自伝的な部分はあ?

クレイグ 「まあ、どちらも一部がフィクションで、一部が事実なんだ。全部の曲がそうだけど。だから、自分が知ってること、本当のことを歌うと同時に、やっぱりそこに何か加えなきゃいけない。本でお話を書いたりするみたいだね」

●基本的に、それがあなたのスタイルだもんね?

クレイグ 「うん。最初は自分とか、自分が知ってる他の



誰かについて書いてるんだけど、自分のことが別の人のことになったり、別の人のことが自分のことになったりするんだ。だから、ある意味、すごく幅広くて」

●じゃあ、“ヒーズ・ア・ロッカー”の歌詞に出てくる“トリップ”は、どんなトリップを指してるの？

クレイグ「あのトリップはLSDだよ。僕があそこで触れてるのは、まさにアシッドのこと。それだけ。インタビューで言い足すことがあるとすれば、僕は『LSDから人は多くを救えられるって信じてる』ってことくらいかな。一生を通じてね。それ以上は、何も言いたくないんだけど……。だって、アシッドについて語るのが、僕がアシッドをやってるってこととイコールじゃないから。でも、今までやったことがないって意味でもない。つまり、全部、謎なんだ（笑）」

●うん（笑）。じゃあ、一つ前のアルバムって、すごく悲しみにフォーカスされてたじゃない？

クレイグ「うん」

●今回、客観的に見て、自分達では、何か特定のエモーションに意識的にフォーカスした部分はある？

クレイグ「君が言うように、この前のアルバムには悲しみがあつた。文字通り、僕は地獄に行って、また戻ってきた。死後の世界を見てきたようなものだよ。いろんなことを体験したんだ。でも、後悔は一つもない。多くを学んだって気がするから（笑）。僕はただこのアルバムに関しては、1分半、2分の曲ばかりが詰まったアルバムにしたかったんだ。うん、このアルバムって、『ハイリー・イヴォルヴド』にすごく似てると思うんだ。どっちもポップ・ソングが詰まってるし。この前のアルバムの時は、曲があって、とにかくそれをアルバムにするので精一杯だった。全部吐き出して、悪魔払いをするためにね。でも、今回は違うんだ。ほら、だって、カヴァー見てもわかるよね？ 前回はこれ（と、黒いカヴァーを見せる）がカヴァーだった。で、今回はすごくカラフルで、生き生きしてる。僕にとってはこれ、ライフってことなんだ。僕にとっては、今の生活がこれ。で、前は生活がこんな風だったんだよ」

ヘイミッシュ「真っ黒っていうね。常にダークで」

クレイグ「そう（笑）」

●この『メロディア』って、タイトルについては？

クレイグ「タイトルに関しては、長すぎないタイトルにしたかったってことだけ。『メロディア』ってクールだと思っただけ。僕にとっては意味があるんだけど……。他の人には別の意味があってもいいしね。うん、僕にとってはクールな言葉ってだけかな。あと、このカヴァーもかなり僕が手掛けたんだ。写真とか、コラージュとか。どうしたかっていうと、アルバムが出来た時に、とにかくたくさんヘイミッシュが写真を撮って。ちょうどその頃、僕ら、シルヴァーチェアを観に行っただよ。で、これは（と、中央上部の写真を指す）は、そのライブの後の写真。ほんとに（シルヴァーチェアの）ダニエルも入ってたんだけど。そう、ダンディ・ウォーホルズがやったのが好きだったんだよね。ほら、有名人の友達と自分達で写真を撮ってたら？ コートニーがミック・ジャガーと一緒に写ってたり。あれが気に入ってさ。僕、コートニーのことはすごく尊敬してるんだ。だから、このカヴァーも作品の一部なんだよ」

●じゃあ、このアルバムについては、最初からこの短さで、この曲数でっていうところは決めてたの？

クレイグ「うん、僕は新曲を14曲入れて、全部がヒット・ポップ・ソングみたいな感じにしたかったんだ。キラキラして、聴く人の注意をすぐに惹きつけるようなね。で、金を稼いでくれるような（笑）」

ヘイミッシュ「途中で中ダレしたり、止まるようなことがない、流線型のアルバムっていうかね」

クレイグ「インストゥルメンタルの部分もそんなにないよね？ かなりソング・ベースのアルバムになってると思う。“ヒーズ・ア・ロッカー”も“オレンジ・アンバー”もそうだし。僕が『自分の痛みについて歌ってる』とか、そういうレコードじゃないんだ。これは、小さな絵とか、アート・エキシビジョンみたいなレコードなんだよ」

●実際、大半の曲は、1分台か、2分前後なんだけど、アルバムのご真ん中に一曲だけ、6分以上もある“トゥルー・アズ・ザ・ナイト”が入ってる。これは？

クレイグ「最初、あの曲を作った時は、アルバムを締め括る曲かもしれないと思ってたんだ。でも、ヘイミッシュとプロデューサーが、『これをセンターピースにしたらかどうか？』って提案してきた。曲順に関しては、ホント試行錯誤したんだ。僕ら、〈サウス・バイ・サウスウエスト〉に出て、NYとLAでライブやって。その間ずっと、毎日違うトラックリストを作ってたんだよ。でも、最終的にこれが出来た時に、すごく満足出来たんだ。バンド全員で作ったし」

●じゃあ、アルバムの最後が、すごくサイケデリックな“シー・イズ・ゴーン”で終わってるのは？

クレイグ「確か、それはプロデューサーのロブのアイデアだったと思う。この曲、ウォール・オブ・サウンドのビッグなサウンドがあるよね？ これに比べると、ほとんどの曲は、ギターとヴォーカル、ベースとドラムだけのすごく削ぎ落としたサウンドだろう？ でも、あの曲だけはアコースティック・ギターもディストーションのかかったエレキギターも入ってるし、山ほどヴォーカルが重なってるんだ。とにかくトリッピーで、アシッドな曲なんだ」

ヘイミッシュ「最後にビッグに終わる感じがある。だから、あの曲と“トゥルー・アズ・ザ・ナイト”が最終曲候補だったんだ」

クレイグ「ちょっとスベシーな感じがあるからね」

●これはマサコの入れ知恵なんだけど、9曲目のタイトルは、クレイグのガールフレンドの本名なんだよね？

クレイグ「カーラ・ジェイン？」

●そう。

クレイグ「うん」

●でも、そんな風にパーソナルな曲を歌うなんて、ジョン・レノンが君くらいだよ？

クレイグ「ああ、勿論、僕はジョン・レノンのことは神として崇めてるから（笑）」

●でも、こんなにもパーソナルなラブ・ソングを歌うのは怖くないの？

クレイグ「勿論！ こんなにあからさまなラブ・ソングは僕にとって初めてだったんだけど、やってて楽しかったよ。ほら、この曲の一つ前の“ブレインデッド”って、パンク・ソングっていうか、まるで地獄から生まれたメタル・ソングみたいだろ？ そういう曲の後にこれがあるのも気に入ってるんだ。僕らのアルバムって全部そうなんだけど、出来る限り、あちこちに飛び移って、どんなシフトするんだよ」

●じゃあ、1stアルバムには、明確な野心みたいなものがストレートにあったと思う。で、2ndアルバムの場合、“イーヴィル・タウン”みたいな曲に顕著だと思うんだけど、業界のシステムに対する違和感みたいなものがあからさまに表出するようになった。つまり、野心よりも、とにかく音楽業界の一部であることに対する違和感だよ。今、そういった野心との距離はどう？

クレイグ「僕は今、自分達がやってる音楽にすごく自信があると思う。だって、他のことに関しては、僕はまったくダメだから。コンピュータも使えないし、携帯電話も持ってない。そういったすべては、僕にとってはとにかくすごく違和感のあるものなんだ。僕が好きなのは、ただCDを聴いて、曲を書くことだけ。うん、だから、野心はあるよね。だって、やっぱり野心的じゃなきゃいけないと思うんだよ。だって、今じゃ、ホントにたくさんバンドがいるだろう？ 僕らが最初に始めた頃に比べても、ホントにいろんなバンドがいる。だからこそ、アーティストでいるなら、そこはリストの一番上であるべきなんだ。野心の高さがね。グレートなものに到達するにはそれしかないから」

●あなた達が仲が良かったザ・ミュージックは、アメリカでのレーベルが同じだったじゃない？

クレイグ「うん」

●で、僕らからすると、まったく同じタイミングで、両方のバンドが急激に疲弊してって、内側から瓦解していくのを目撃したわけなんだよね。今振り返っても、当時の音楽シーンで生き抜くのは、それだけハードなものだったのかな？ そこは、どう？

ヘイミッシュ「うん、確かにあれはハードワークだったよ。『ハイリー・イヴォルヴド』と同じ頃に、ザ・ミュージックも1stアルバムを出して、俺達も彼らも同じレーベルにいたんだよ。だから、ザ・ミュージックとはアメリカと一緒に長い間ツアーすることになったんだ。とにかく、『ツアーを続けろ、もっとツアーをやれ』って言われ続けた。俺達も、ロブとかも20歳とかだったから、ライブをやったらその後すぐにバーから追い出されて。かなり惨めな気分させられることも多かったんだよ」

クレイグ「勿論、楽しいこともあったけど。でも、確かに、つらいこともあった」

ヘイミッシュ「だから、多分、俺達は意識的にもうちょっとスケールを小さくしたんだ。バンドがバラバラになっちゃうためにね（笑）」

●ここ最近も、ザ・ミュージックの連中と話したりしてるの？

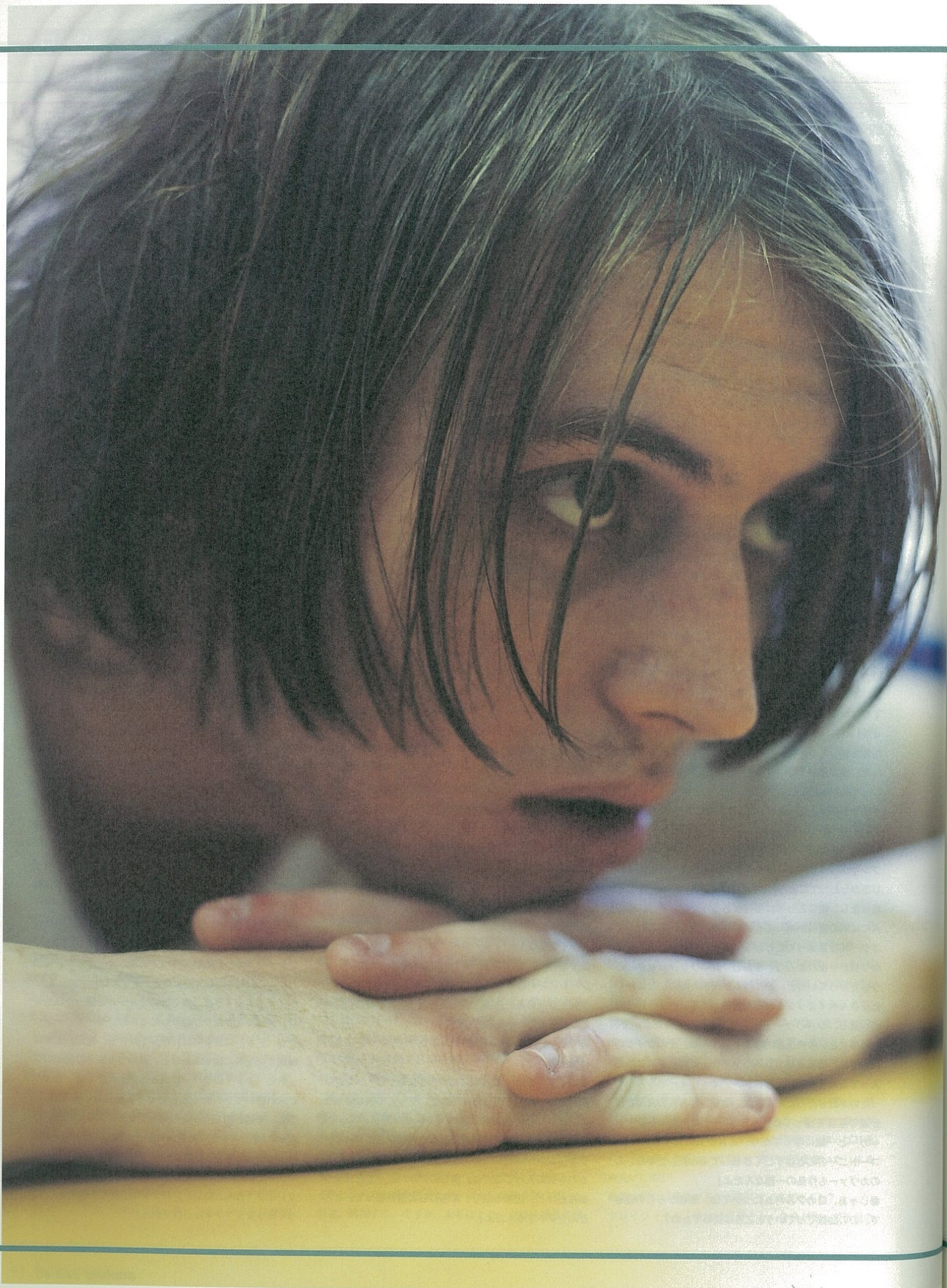
クレイグ「ずっと連絡は取ってるよ。メールとか、電話とか。この間も電話で話したばかりだし」

ヘイミッシュ「うん、俺も携帯でメールを送ったばかり。メールとかはやり取りしてるんだ。ザ・ミュージックも〈フジ〉に来るのはわかってたから。俺達、土曜は韓国でフェスに出るんだけど、あいつらもその韓国のフェスと〈フジ・ロック〉に出るんだよね。でも、ちょうど入れ違いでさ。だから、日本では会えないんだけど。でも、来週、向こうがオーストラリアに来るんだよ。だから、『オーストラリアで会おう』って。実際、もう長い間会ってないんだ。2年かな？ 俺達が2年前にイギリスでプレイした時が最後だと思う」

クレイグ「うん、ロンドンのライブに来てくれてさ」

ヘイミッシュ「フィルとロブがね」







多分、1stアルバムをレコーディングしてた時が、僕の人生において一番エキサイティングな時期だった。でも、この『メロディア』っていうアルバムって、『ハイリー・イヴォルヴド』の続きって感じがしてるんだ。音楽的に比較するとね。だから、“ハイリー・イヴォルヴド”から始まって、“オータム・シェイド”へと続くあの感じを、今回は、アルバム全編でキープしたいと思ったんだよ。まるで一つの長い曲みたいだね

●でさ、アメリカをツアーしてる時に、俺達がクレイグとロブを表紙にした時があったじゃん？

クレイグ「うん、今まさにちょうどそのことを思い出してたところ。おかしいね（笑）」

●当時、クレイグが言ってたのは、「自分達みたいな新しい世代によって、変化が起こりつつある」ってことだったんだけど。実際、そうした変化は、その後、どうなったんだと思う？ さっき、今はもっといいバンドがたくさん出てきてるって話もあったけど……

クレイグ「あ、僕、今はいいバンドがたくさんいるとは言っていないよ。ただ、『たくさんバンドがいる』って言うただけで。それに、僕らがシーンの一部であったことは一度もないからね。僕らはストロークスとかと並べられて……。勿論、それは良かったと思うんだ。そういったバンドは僕らも好きだったから。でも、僕はそういうことはよくわからない。いいアルバムを作ろうとしただけだからさ。90年代後半、僕は曲を書いて、バブとかでライブをやってたんだけど、その次の年代に、僕らはアメリカに行って、レコードを作った。僕らはそうしたかったんだ。だから、あの頃はすごく楽しいとハードワークが組み合わさってた時代だった。そう、僕らはもうすでにかなり多くのことを達成したと思う。明日引退したって、オーストラリアのバンドとしてはいろんなことをやれたと思うし。アメリカでもイギリスでも。アメリカではザ・ミュージックと一緒に二回ツアーをやったし、大勢の人達の前でプレイした。うん、ザ・ミュージックはいいバンドだよ。でも、確実にいいバンドも、悪いバンドも増えたと思うな。残念なことに、ひどいものたくさん耳に入ってくるっていう（笑）」

●じゃあ、ここ数年の間に出来た、一連の新しいバンドについては、どう？

ハイミッシュ「一番嬉しかったのは、アーケティック・モンキーズが、俺達とストロークスの影響でバンドを始めたって言うことだな。そういうインパクトを自分達が与えたっていうのは、すごくクールだと思った」

クレイグ「うん。たとえば、僕らがU2やR.E.M.ではないにしても、僕らもいくらかインパクトを与えたんだって思えるのはすごく嬉しいよ。僕らがロック・ミュージックにインパクトを与えたことは事実なわけだから。だって、ハイミッシュが言ったみたいに、アーケティック・モンキーズが出来たんだからね」

●アレックスと話した時に、「クレイグがジーンズに絵を描いてのを見て、次の日、早速自分もジーンズに絵を描いたんだ」って言ってた。

クレイグ「へえ」

ハイミッシュ「ははは！ 音楽的影響だけでなく、ファッション的影響も与えたってわけだ」

●とにかく、ヴァインズの話はよくしてた。

クレイグ「すごく嬉しいな。僕、彼は天才だと思うし。ザ・ラスト・シャドウ・パベッツのレコードもすごかつ

たし。素晴らしいアーティストだよ」

ハイミッシュ「何度か会ったこともあるんだよ。すごくクールな連中さ。最後に会った時も、もうすでに大成してたのに。特にイギリスではね。なのに、まだ普通の4人の野郎って感じだった。どこの出身だっけ？ ニューキャッスル？ いや、シェフィールドだ！」

●そうそう。

クレイグ「マーク・E・スミスの出身地だよ。それと、バルブもね（笑）」

●クラクソンズもあなたの話、してたよ。

クレイグ「クラクソンズのことは、僕ら、すごく好きなんだ。彼らのライブに行ったんだけど、その後、会ったんだよね」

●ああ、そのことも話したかも。サイモンに、「クレイグはあなたのアイドルなんだって？」って言ったら、もう顔を真っ赤にしてた。

クレイグ「僕、すごくクールなバンドだと思ったな。すごくグレートで。僕ら、クラクソンズのシドニーのライブに行ったんだよ。で、ライブの後ちょっとつるんで。エキサイティングな新しいバンドだと思った」

ハイミッシュ「クラクソンズも俺達のファンだって知らなかったよ。クールじゃん（笑）」

●でも、本当に、君達がいなかったら始まらなかったことがたくさんあると思うよ。

クレイグ「ありがとう。でも、アーティストとして、僕は自分のベストを尽くするだけだから。それが人に影響を与えるんなら、これ以上のことはないよね。別に謙遜しないでいいよね（笑）」

ハイミッシュ「うん、使い捨てとかじゃない気持ちになれるよな。みんなが今でも大事にしてくれてるんだから。グレートだよ」

クレイグ「そう、僕がどんな風に振る舞おうと、何があるかと、僕らのアルバムは長い間残っていくんだ」

ハイミッシュ「プラスチック製だから、すぐに割れないしな（笑）」

クレイグ「今じゃ、ライブもずっと良くなったしね。ようやく僕自身も楽しめるようになった。スケジュールもうまく組まれてるし、前に比べて、ずっとプロフェッショナルなアプローチが取れるようになったと思う。そう、CD、アルバムに対しては僕、100%プロフェッショナルだったと思うんだよ。そうやって『ハイリー・イヴォルヴド』も、他のアルバムも作ってきた。で、ツアーに出て、騒いで。でも今は、ライブでもハーモニーを入れたり、出来るだけアルバムの音を再現しようとしてるんだ。硬直した、つまらないものにならない程度にね。だって、バンドのライブを観て、CDを聴いてるみたいな気持ちになると、やっぱり退屈だよ。だから、バランスを取らなきゃいけないんだけど、僕らは、その最適なバランスをようやく見つけたと思う」

●じゃあ、今はどういうモードなの？ このアルバムの

プロモーションもあると思うんだけど、その後とか。

クレイグ「もう新曲が出来てるから、すぐにデモにするつもりなんだよね。新曲が5、6曲あって。2、3週間以内にデモをレコーディングするつもりなんだ。それには僕、すごくエキサイトしてる。みんなは今、このアルバムを聴き始めたところだけど、僕らの“今”ってわけじゃない。勿論、ステージでプレイするのは楽しいんだよ。でも、僕はもう新曲のことを考えてる。そこは僕の性格なんだ。バンドに入ってからずっとそう。やっぱり一番大事なのはいい曲をたくさん書くことなんだ。それが唯一のクライテリアだし、一番僕が目指してるのはそこだしね。家にいる時はそれしかやってない。デモって、僕にとってはすごく神聖なものなんだ。例えば、初期のデモを聴くと、僕にはまるで魔法みたいに思える。去年、またロブ（・シュナッフ）とレコーディングしてる時も、僕、彼に言ったんだ。『多分、“ハイリー・イヴォルヴド”をレコーディングしてた時って、僕の人生において一番エキサイティングな時期だった』って。でも、このアルバムのミキシングの段階でも、僕はもっと興奮してたかもしれない。実際、この『メロディア』っていうアルバムって、僕からすると、『ハイリー・イヴォルヴド』の続きって感じがしてるんだ。音楽的に比較するとね。だから、“ハイリー・イヴォルヴド”から始まって、“オータム・シェイド”に続くあの感じを、今回はアルバム全編でキープしたいと思ったんだ。まるで一つの長い曲みたいだね。ね……誰か、僕がしゃべりまくるの、止めてよ」

●大丈夫（笑）。でも、“オータム・シェイド”のシリーズは、今回の第三弾の後、まだ続く予定なの？

クレイグ「僕、レコーディング中に、ロブにこう言ったんだよ。『もうこれで終わりだ』って。そしたら、ロブが『そんなこと言っちゃいけない』ってね。で、『オッケー、じゃあ、そこは言い切らないことにする』ってことにしたんだ。うん、これからどうなるか、まだ可能性が開かれてる方がナイスだと思うし。つまり、今でも4番目があるかもしれないってこと（笑）」

ハイミッシュ「もうない」って言っちゃダメだよな」

クレイグ「その通り（笑）」

●じゃあ、最後の質問です。音楽を始めたことで、当然、いい変化もホントたくさんあったと思うんだけど、逆に、何か悪い変化はあったと思いますか？

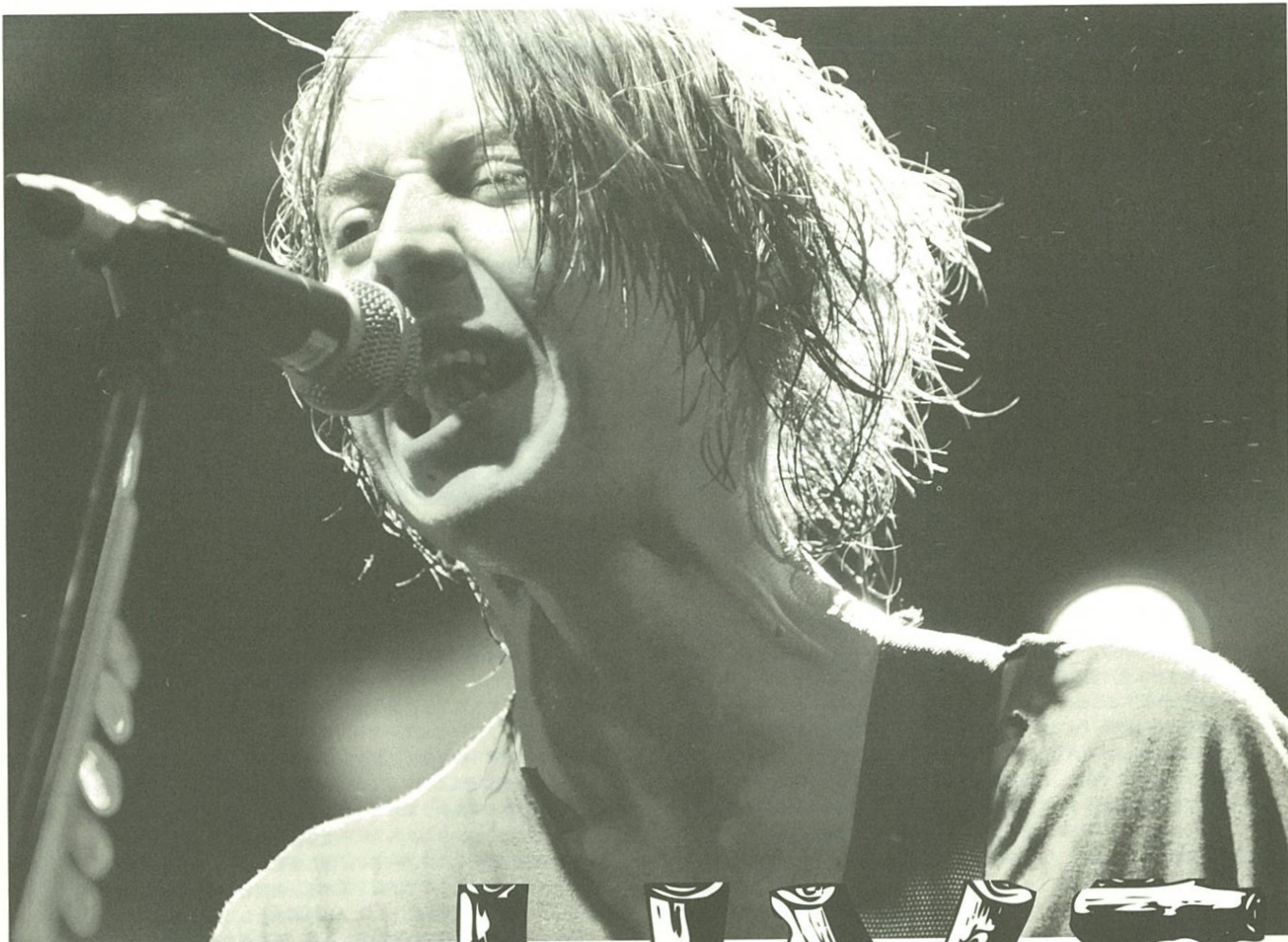
クレイグ「いや、まったくない。僕が考える限り、僕は自分の人生で一度もミスをしたことがないから」

ハイミッシュ「（笑）」

クレイグ「だって、僕は常にポジティブなものを外に出してきたんだ。“スクリーム”や“ゲット・アウト”みたいな曲でさえね。ああいった曲の中での僕は壊れてるかもしれないけど、同時にあれはアートでもあるんだよ。ロックンロールでもあって……。僕が見る限り、僕が作った4枚のアルバムと、僕がこの地上でやってきたことすべてに僕は満足してる。絶対にね」

5





FUJI ROCK FESTIVAL (THE VINES)  
by KAZUMICHI KOKEI

# LIVE

*reviews*

FUJI ROCK FESTIVAL '08 / 25, 26, 27 JULY NAEBA SKI-JOH  
HIGE / 16 JULY LIQUIDROOM EBISU  
MO'SOME TONEBENDER / 25 JUNE LIQUIDROOM EBISU  
SOKABE KEIICHI BAND / 3 JULY NANBA HATCH  
TAVITO NANA O & KEIICHI SOKABE / 11 JULY LIQUID LOFT EBISU





## 25 JUNE

MO'SOME TONEBENDER [モーサム・トーンベンダー]  
リキッドルーム恵比寿

4、5、6月と3ヵ月連続(リキッド)公演を行ってきたモーサム。公演ごとにメンバーの一人ひとりがライブをプロデュース(5月の藤田さんの時は、なんと藤田さんの弾き語りもあったらしい!)、最終回の今公演は、ヴォーカル百々さんの回。照明はシャンデリアで、小オーケストラ隊もいて、いつもと全然違う雰囲気! 出来立ての新作や、会場限定で毎月1枚ずつ売られていたシングル(3ヵ月連続で即売。もう手に入りませんよー)からも何曲か演奏してくれたり、とにかくスペシャルなライブでした。新曲を聴く限りでは、またキツェでナンセンスなモーサムに戻ってきているようで、嬉しい限りです! もうすぐ出来上がるアルバムが超楽しみです! (永松雄大)

## 3 JULY

曾我部恵一BAND  
なんばハッチ

ライブ当日から時間が経って、何か言いたくしょうがないけど、何か言えることがあるんだろうかと思っています。あの日、僕は最高のロックンロールに出会ったんです。それからの僕は、「I Love Rock'n'Roll」なんです。100パーセント本気で……。ああ、これしか言えることがないよ、僕には。僕は本当に「魔法のバス」に乗れる気がしたんだ。朝まで、いやずっとずっとロックンロールは僕の側にいてくれるんじゃないかって。終わった時、とてもとても悲しかった。みんなが笑顔で帰って行く中で、僕は一人会場の中で係員に追い出されるまで座り込んでいた。誰かと一緒にいたかった。だけど誰の顔も見えなかった。僕はただ、ロックンロールと一緒にいたかった。

(兵庫県/三澤淳史/20歳)

## 11 JULY

七尾旅人、曾我部恵一  
リキッドロフト恵比寿

七尾旅人と曾我部恵一による、オールナイト弾き語りライブ。8割以上を占めていたであろう、曾我部さんのファンに七尾旅人はどう映ったのでしょうか? 七尾さんは、サニデー・サービスの「サマー・ソルジャー」、「白い恋人」をカバーしてました。七尾さんのフィルターを通すと随分と違った印象の曲になるんですね。曾我部さんは180度雰囲気が変わり、終始笑いが絶えないステージでした。最後は二人で弾き語ったのですが、曾我部さんの様子が変だ! 異常にテンションが高くなり、叫び出したと思ったら、トイレに行きたがり30分帰ってこないぞ! 帰って来たと思ったら、ステージ上で爆睡しちゃいました……。曾我部さんが寝ている横で弾き語る七尾旅人さん……。笑)。いいもの観れました。(永松雄大)

## 16 JULY

髭(HiGE)  
リキッドルーム恵比寿

立ち込めたスモークの中から現れた一匹と5人。これは夢? それとも現実? と思えるほどのめくるめく40分。休憩を挟み、金太郎の着ぐるみで登場した須藤氏、そして第二部の1曲目は「ロックンロールと五人

の囚人」。何度かあったアンコールの締めは「ハートのキング」。悪ノリなのか真面目なのか。全編を通していつも以上に笑顔でノリノリで踊りながら演奏しているメンバー。なんだかいろいろな意味でニヤニヤが止まらない2時間だった。(神奈川県/佐藤寛子/26歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、くるり]

## 苗場スキー場

マイク・テストの時から岸田さんが「かえるの歌が聞こえてくるよ、クワックワッ〜」と歌い、すでに心地よいゆるい雰囲気が充満。「それではまた後ほど」というメッセージの1分後にライブ開始(笑)。新曲に始まり、次に演奏されたのが「さっきの女の子」! これは涙ものでした。その他にも代表曲目白押しでしたが、「ワルツを踊れ」からは1曲もなし。彼らはもう次に向かっているようです。すごいぞ、くるり。ありがとう、くるり。(大阪府/川口逸平/22歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、ジェイミー・リデル]

## 苗場スキー場

オーセンティックなバンド・スタイルになるのかと思ったら、「アナザー・デイ」から始まったステージは、生バンドとラップ・トップを駆使した、なかなか実験的なスタイル。自分の声をサンプルしまくって独特なファンクネスを作り上げていく。それらが組み合わさってバンドが爆発する時がやはり最高で、「リトル・ビット・フィール・グッド」は、まさにフィール・グッド、しかもジェイミー、思った以上に歌うまい! しかも黒シャツとストライプのパンツを着こなし、舞台の端に座って歌っちゃったりするから、もう女の子はイチコロでしょう。(大阪府/木津毅/23歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、ザ・ヴァインズ]

## 苗場スキー場

初っぴなから、各アルバムのリード・シングル連発で始まったライブは、クレイグが「ビューティフル」と言うくらいの盛り上がり! それもそのはず、みんなが待ち望んでいたヴァインズの、クレイグのライブだもの。盛り上がり過ぎて途中で挟まれる静かな曲がクール・ダウンになって助かりました。終盤には「ミス・ジャクソン」までやってくれました。クレイグも満足気には最後はステージ破壊です。お帰りなさい、クレイグ。また来てね。(新潟県/茂木雄作/25歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、ザ・ヴァインズ]

## 苗場スキー場

キャンセルされた2004年のフジから、もう4年。今年のラインナップにヴァインズの名前を見つけた時は、喜ぶと同時に不安もあった。ほんとに来るのか? ちゃんとライブ出来るのか? でも、満員のレッド・マーカーにヴァインズは現れた。あのクレイグが、ヴァインズが目の前で演奏している。それだけで感情が爆発し

そうだった。そして、曲のイントロで歓声を上げ、「ライド」では手拍子をばっちり決め、ほとんどの曲でコーラスしまくるオーディエンス。みんな最高。ほんとに、「この日を待ってた」って気持ちが一つになった気がした。お帰り、クレイグ。ゆっくりでいいので、いつかまたライブを観せて欲しい。これが伝説になるのは嫌だ。(大阪府/竹井将吾/25歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、オールナイト・フジ]

## 苗場スキー場

電気グルーヴ、「N.O.」やってくれて超嬉しかった。その後の、カガミ〜ボール・ヴァン・ダイク〜スキラムの流れが何よりも完璧過ぎました。残ってる人もまばらな中、結局朝6時過ぎに音が止まるまで残って踊っちゃいました。最後にブライアン、「では、これからぐっすり寝て、また今夜アンダーワールドあたりで会いましょう」とか言って。地面はゴミだらけでしたが、それがどうしようもなく気に入った。あの夜ほど、きれいに見えた月もない。ウサギの被り物した女の子二人組にピース!(京都市/佐々木峻一/20歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン]

## 苗場スキー場

まず思ったのは、ピリンダ可愛いってこと(笑)。みんな口々に「かわいい!」とか「スタイルいい!」とか言っていました。ケヴィンもなんだか時折見せる微笑が神秘的な雰囲気を醸し出していました。でも、何といても最後の「ユー・メイド・ミー・リアライズ」でのノイズ地獄では我々を凍り付かせてくれましたね。あれは何分くらいやってたんでしょうか? 僕の体感では20分以上に感じたんですけど。寝そうになりました(笑)。マイブラに罪はない。僕が疲れてただけなんです。(宮城県/平井陽介/27歳)

## 25 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン]

## 苗場スキー場

1歳の長男を連れて、家族で初のキャンプ参加。バリエアをほおばり、ストーンズ・サークルで太鼓を叩き、キッズ・ランドではしゃぎ、マイブラに驚き。そして2日目は、5回の食事と2回の風呂だけで1日が過ぎていきました。とりあえず、無事に終わってよかったです。(神奈川県/齊藤明/33歳)

## 26 JULY

## FUJI ROCK FESTIVAL '08

[フジ・ロック・フェスティバル、ゴティエ]

## 苗場スキー場

登場するや否や、その端正なルックスに場内騒然。顔が小さい! プログラム音に、一人で鍵盤、ドラム、パーカッションを行き来しながら生音を重ねていく、とても非効率な演奏スタイルは、パフォーマンストとして非常に楽しいものでした。MCがほとんど日本語